

9月6日未明、北海道で震度7という激震が起こり、北海道全体が大規模に災害を受けたことが報道され、心が痛みます。地震予知などの研究がなされているとはいえ、実効力を一度も見聞きたことがありません。そればかりが、いったん発生しても、停電、インフラの遮断など、手当ても後手後手であることが毎度のことです。自然の脅威の前になすすべもなく、茫然自失で、逃げ惑う人々のことが気がかりです。どうぞ、安全が守られますようにお祈りいたします。

夫は食道がん、胃がんを素晴らしい治療で、完治させていただきましたが、この度、悪性リンパ腫の発病は、私にとっては地震のような、突然の事態で、正直なところ一瞬、足元がぐらつき、思考停止のような気分になりました。けれども持ち前(?)の「冷静かつ肝っ玉」を取り戻し、目下私にできる作業の「見舞い」に明け暮れているところです。



8月13日、夫は定期健診を受けたところ、CTを見た主治医が回盲部に炎症を発見し、即入院し、検査を受けました。夫はその時初めて自分のお腹に固いこりがあるのに気付いたのです。検査の結果、悪性リンパ腫であることが分かりました。「悪性」というネーミングに驚きます。ともかく、「まな板の鯉」となり、お医者様に委ねる生活となりました。

悪性リンパ腫とは血液の白血球の中のリンパ球と呼ばれる細胞が「がん化」したもので、リンパ球が全身をめぐるっていますから、手術で摘出できるものではありません。悪性リンパ腫は60種類以上もあるとのこと。それぞれのタイプで抗がん剤の種類、投与の仕方が異なるとのこと。どれかを調べたところ、日本では発症の頻度は低いものの、進行は日/週単位である「高悪性度リンパ腫」とわかり、検査より先に治療を、と診断されました。



せつちな夫らしく、病気もどんどんと進んでいくタイプとなりました。主治医が「病名と治療方針」を告げてくれました。「完治を目標に治療します」と力強い言葉でした。昔は60歳以上は老人であり、体力もなかったけれども、現在は「人生100年、70歳代は若い!」と言われるのです。積極的な治療をしていただくことをお願い致しました。8月31日からすぐに準備段階の抗がん剤の点滴が始まりました。けれどもこれまでも何の症状も感じない「鈍感力」に優れていた夫は、病室で点滴の管に繋がれながらも

痛みも苦しみもなく、好きな本、パソコンを持ち込み、普段通りの生活をベッドの横で始めました。

本格的な抗がん剤治療が開始したのは9月3日からでした。抗がん剤は5日間投与され、つぎの投与まで休み、21日間を1コースとします。それを6回繰り返すこととなります。抗がん剤は副作用があって、苦しいと聞いています。夫の悪性リンパ腫は進行が速いけれども、抗がん剤の効き目が非常に高いタイプとのこと。従って抗がん剤で一度に大量の腫瘍細胞が死滅し、腫瘍崩壊症候群を引き起こすことがあるとのこと。副作用の出方をチェックしながら、治療をしてくださっています。抗がん剤投与から3日目でお腹の固い大きなしこりが手で触っても感じられないほど小さくなっていました。すごい効き目だと思いました。ただ、小水にその死滅した腫瘍細胞のかけら、尿道結石のかけらが混じって出てきます。それが桃色のような固形物として見えるのです。現在の医療はとても進んでいると実感しました。「忍耐して闘病に励む」と夫はメールを送ってきました。

